

# 昆虫採集と自然保護

奥谷 禎一

近年昆虫採集が盛になり、自然に対する興味が一般的になつたことは誠に喜ばしいことである。しかし、いたずらに珍種をあさるため、一部の原生林が荒されたり、乱獲によつて絶滅寸前の珍種も多い。近頃は、チョウの生活史がわかっているから、発見されるとすぐにその食草や生活場所はわかつてしまい、荒されることになる。行政当局は直ちに天然記念物指定と何とか保存を計ろうとしても、こんな連中には馬の耳に念仏で、どうにもならない。全く困つたことである。彼等に云わせると、「行政は林道をつけたり、殺虫剤を空から散布したり、もつとひどいことをしているではないか」という。確かに理屈はある。盗人にも1分の理かも知れない。私はこの問題について、やはり自然をすこしでも知つている人々による破壊は許せない。チョウの生息地が、宅造されるから、その前に取つておこうというなら、私はわかる。しかし、保護されている原生林やら、寺の境内を荒すなどは言語道断明らかな犯罪である。野草が山草家によつて荒され、一部のランなどはもう産地にみられないという。道路(主に林道)によつて、自動車で行けるようになると、たちまち都会人がやつて来て、その近くの部落の生活の糧となる山菜荒しをやり、次は勝手に山の木を掘り取る。なげかわしい次第である。北欧のある国では、住宅地の近くの山は、そこの住民許可なく入れないという。法律で定められているわけでなく、慣習だという。日本の全土にこんな慣習をといつても無理だろうが、少くとも昆虫採集のモラルとして、珍種は愛好家が皆んなで、保護するという慣習はできないものかと思われる今日である。こんなひどい世相のため、新産地は全く発表できなくなり、いつの間にか行政や大企業の手で消されてしまう時代になりそうだ。

兵庫県でも例外ではない。地元の人々は何とか、いつまでも珍種がいてほしいと願つていても、何時の間にか知れわたり、遠方(どうも在京の連中らしい)から、新幹線でやつてきて荒しまわつてしまう。折角「きべりはむし」が兵庫県の昆虫相を明らかにしようと思つても、反対の結果、すなわち兵庫県の昆虫荒らしに利用されそうで、全く恐ろしい。少くともチョウだけは、産地を正確に伝えられなく、困つている。

このような乱獲を防止する名案があつたら、御教示賜りたい。